

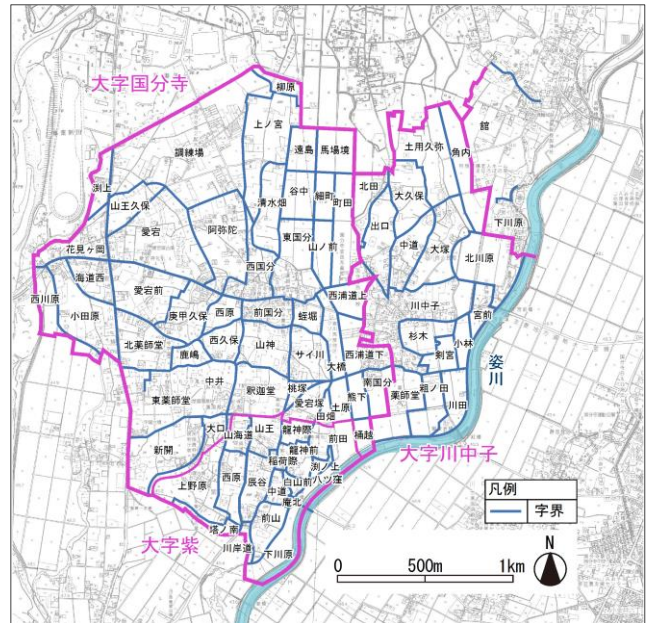
## 2. 国分寺地域にみる歴史的風致

### (1) はじめに

国分寺地域は、本市の南東部、国分寺地区の西部に位置する。地名の由来となった下野国分寺は、奈良時代、聖武天皇による国分寺建立の詔<sup>みことりのり</sup>によって諸国にもうけられた国分寺のひとつとして思川左岸の台地上に建立され、国分寺の東方に国分尼寺が設けられた。また思川と姿川に挟まれた国谷台地には国分寺創建以前の古墳時代後期以降、大型の前方後円墳をはじめ多くの古墳が築造され、さらに思川の対岸には下野国庁<sup>こくちやう</sup>が置かれるなど、この地域は古代下毛野の中心であった。そして下野国分寺・国分尼寺を中心に思川と姿川に挟まれた国谷台地上に集落が形成されていった。

国分寺及び国分尼寺が衰退した後、古代には官寺であった国分寺は地域の信仰施設として存続し、近世までには平地林となったが、古代の寺院跡として地域住民には認識されていた。国分寺という仏教寺院としては、中世にこの地を支配した小山氏の保護を受け、場所を変えて現・国分寺として引き継がれ、現在まで地域住民の信仰の活動拠点としての役割を果たしている。

このように古代の国分寺地域は、信仰や政治の中心として発展したが、その後は大きな開発などはなく、空間の基本構造は変化することがなかった。寺院跡は平地林となり遺構が保護され、集落や人々の生活は、寺院跡の周囲で続けられてきた。そして大正10年(1921)に下野国分寺跡が、昭和40年(1965)に下野国分尼寺跡が国指定の史跡となり、今日まで発掘調査や文化財として保存整備が進められている。



国分寺地域（大字国分寺）と字名称



下野国分寺跡・国分尼寺跡

<下野市教育委員会『下野国分尼寺跡及び周辺整備基本構想』,2012,巻頭写真>

## (2) 下野国分寺・国分尼寺の沿革

### 1) 創建にいたる背景

天平13年(741)、聖武天皇は仏教によって国家を安定させることを祈念し、「国分寺建立の詔」を發した。この詔における寺地の選定にあたって、「其れ造塔の寺はまた国華たり。必ず好處を択んで実に長久にすべし。」と命じている。国華とは、国の名誉の意であり、詔では寺院を長く保つための好處として、集落から適度な距離をとった立地とし、国司は寺院を莊嚴に飾り、清潔に保つように推奨している。

### 2) 下野国分寺・国分尼寺の建立

下野国の寺地は、現在の下野市国分寺の地が「好處」として選定された。おおむね平坦な台地上にあって、水害等の危険もなく、下野国府方面から思川を渡河して下野薬師寺方面へ向かっていた古代の官道(東山道)が通っていたためである。なお、関連資料などから、寺院のための土地の選定はすぐに行われたものの、寺院の造営には長期間かかったと考えられている。



下野国分寺の伽藍推定復元鳥瞰図

発掘調査の報告によると下野国分寺の伽藍配置は、南門、南大門、中門、金堂、講堂が南北に一直線に並び、中門と金堂が回廊で結ばれるいわゆる東大寺式である。塔は南大門と中門の東に設けられ、鐘樓と經藏は金堂と講堂の間の東西に配され、講堂の北側には僧坊、北門が設けられていたと考えられる。また、主要な堂宇の完成前から仏教寺院としての活動が開始されたようで、金堂の東側に大型掘立柱建物が設けられていたほか、その近くで鉄滓\*が出土したことから仏具類の鑄造が行われていたようである。

国分尼寺は、国分寺の東約600mの位置にあり、国分寺よりも寺域が小規模であること、塔が確認できないことを除き、伽藍配置のほか、伽藍地や寺域に塀や溝を設けるなど同様の形式、構成であったことが判明している。そして創建期の遺構から、金堂の造営中に仮の仏堂を東側に設けて仏事を行っていたと考えられる点も共通する。

\*鉄滓：製鉄の際に出る鉄のくず。

### 3) 変遷と衰退

下野国分寺・国分尼寺は平安時代まで、東国仏教の中心であった下野薬師寺とともに官寺として、また仏教の拠点としての役割を果たした。これまでの発掘調査などにより、下野国分寺・国分尼寺は伽藍の変遷や建築活動はおおむね同様であり4時期に分けられる。

下野国分寺・国分尼寺はともに寺院としての終焉は明確ではないものの、国分寺は少なくとも11世紀までは寺院として機能していたと考えられ、国分尼寺は後の時代の住居跡の様子等から10世紀後半には寺院地溝が埋没し消滅していたことが判明しているが、関連資料では国分尼寺は、僧寺である国分寺の従属的な位置づけであり、国分寺に先行して平安中期以降衰退していったとされる。

## 発掘調査に基づく下野国分寺・国分尼寺の変遷

<b>I 期(創建期～8世紀中葉)</b>
主要な堂宇の造営期で、造営中の金堂の東側の仮の仏堂で仏事を行っていたと考えられる。
<b>II 期(8世紀後半～9世紀前半)</b>
主要な堂宇が完成し、伽藍地は掘立柱塀、寺域は溝を設けることで区画する。
<b>III 期(9世紀後半)</b>
伽藍地を縮小し、伽藍地の境界に設けた掘立柱塀を築地塀に建て替える。堂宇などの改修が行われる。
<b>IV 期(10 世紀以降)</b>
衰退期。国分寺・国分尼寺ともに 10 世紀ごろに寺域を画する溝が埋まる。

## 4) 中世から近世の下野国分寺・国分尼寺

発掘調査では中世に関する遺物として、下野国分寺の塔跡から泥塔<sup>※1</sup>、寺域内の北方から平安時代の小仏像<sup>※2</sup>が出土した。この小仏像の製作年代は 12 世紀頃と考えられることと、中世の板碑片<sup>いたび</sup>が出土していること、国分寺の金堂跡上面の柱の痕跡等から、13～15 世紀には、倒壊した金堂の基壇上に小規模な堂が建てられ、下野国分寺が国の宗教施設から、民衆経営の集落内寺院に変化したとみられる。そして民衆が現世利益を求めたことから、薬師如来・釈迦牟尼仏が祀られていると考えられている。宇名称として、国分寺跡には東薬師堂、国分尼寺跡には釈迦堂などが残り、これらの宗教施設がのちの現・国分寺の建立に繋がったと思われる。

また鎌倉時代の関連資料によると、中世には国分寺は小山氏の所領となり、官寺でなくなった下野国分寺を小山氏が保護し、これにともない地域住民の信仰の拠点等としての役割を担うようになり、下野国分寺跡の北東に場所を移して受け継がれていったと考えられている。

※1 泥塔：泥土で作った小さな卒塔婆<sup>そとぼ</sup>で中に経文<sup>きょうもん</sup>・梵字<sup>ぼんじ</sup>などを書いて納め、滅罪延命<sup>めつざいえんめい</sup>のために供養するものである。

※2 小仏像：青銅製の増長天像<sup>そうちやうてんざう</sup>であり、帝釈天<sup>たいしやくてん</sup>(梵天<sup>ぼんてん</sup>とともに仏法の守護神で東方を守る)に仕え、須弥山<sup>しゆみせん</sup>の中腹にあって南方を守護する神である。

## 5) 近世・近代の国分寺・国分尼寺跡と現在の国分寺

近世の下野国分寺跡及び国分尼寺跡に関する資料である文化 3 年(1806)に刊行された『日光道中壬生通分間延絵図』には、日光道中壬生通に隣接する国分寺周辺が林として描かれ、そこに「国分寺跡焼失」と記されている。さらに嘉永 3 年(1850)に刊行された『下野國誌』では「さて当国分寺は真言宗の小坊舎なり。但し内跡には古瓦おほくあり。左の如し。都可寒川は郡名なり。」と記され、文字瓦が紹介されている。これは寺院跡が平地林となり、建物が存在しない雑木林でも、ここに国分寺という仏教寺院があったという認識は続いていたことを示している。

明治 36 年(1903)には、古社寺保存法の施行にともなう調査を行った柴田常恵によって「さて其遺跡は現今の国分寺より更に四五丁西方<sup>くぬぎ</sup>の櫟林中にありて未だ開拓さるるに至らず。東薬師堂、北薬師堂等の小字を存し、堂址は三箇所<sup>くぬぎ</sup>にありて一段の高まりを為し、其内の一箇所の如きは四個の切込ある礎石あり。その距離は二間余り隔て、石室は方言大谷石と称するものにして先の五輪塔も同質なり。また、土塀の崩壊したるものと覚しき一条の高まり堂址の南方より東方に廻れり。思ふに往時の堂は南に向へるものなりしならん。」と報告されている。

このように遺跡として報告された下野国分寺跡は大正 11 年(1922)3 月に、下野国分尼寺跡は昭和 39 年(1964)の開発行為がきっかけとなり発見された翌年 4 月にそれぞれ国指定の史跡となった。そして現在までに下野国分寺・国分尼寺跡として、保存整備事業が行われ、その一部が公開されている。また、中世以降、現・国分寺は地域の仏教寺院として信仰、文化等の中心という役割を担い続けている。

## ①下野国分寺跡の文化財指定

下野国分寺跡は、明治30年(1897)の古社寺保存法の施行にともない実施された国による栃木県内の史跡・文化財に関する悉皆調査と、大正7～8年(1918～1919)の史跡名勝天然記念物の調査で対象として取り上げられた。この調査結果を受け、下野国分寺跡は大正10年(1921)に金堂・講堂・塔跡の基壇の範囲が国の史跡として指定された。

大正時代の調査の際に国分寺跡を案内したのは、国分寺尋常高等小学校の教員であり、郷土史家の近藤亀吉であった。近藤は、大正から昭和への御大典記念の国分寺尋常高等小学校における郷土史読本の作者でもあり、国分寺跡や国分尼寺跡と、その周辺の遺跡を調査し、それらの重要性を郷土史として児童に伝えた。教育を受けた児童から話を聞いた保護者たちは、そこから地域の遺跡などへ理解を深めたという。

昭和51年(1976)には下野国分寺跡の保存を目的として、史跡の指定地内の民有地公有化が計画され、同年度から5か年計画で指定地の公有化がすすめられた。昭和55年度(1980)に指定地はすべてが公有地となり、指定地内に所在した5戸の民家の移転も行われた。昭和57年度(1982)から実施された発掘調査を経て、平成17年(2005)3月には、国分寺跡南側の寺院地溝を含めた南側地域と伽藍地外の北東部が国の追加指定を受け、平成16年度(2004)に「下野国分寺跡保存整備基本計画・基本設計」、平成17年度(2005)に「下野国分寺跡保存整備実施設計」を行い、平成18年度(2006)から25年度(2013)に下野国分寺跡の整備工事を実施し、平成26年度(2014)より史跡公園として来訪者の学習と憩いの場として活用されている。



昭和3年(1928)郷土史読本



趾堂講趾々寺分國  
大正時代の下野国分寺跡の様子

<栃木縣『栃木縣史跡名勝天然記念物調査報告 第1輯』,1926>

## ②下野国分尼寺跡の文化財指定

下野国分寺跡は江戸時代から場所が特定されていたのに対し、下野国分尼寺跡は、長い間その所在地が不明であった。のちに尼寺跡であることが明らかになる下野国分寺跡東方の字名称が釈迦堂しやくかどうという地域について、大正15年(1926)に史蹟名勝天然記念物調査会考査員は、『栃木懸に於ける指定史蹟』のなかで、「櫟林の中には寺址に在るものに比すれば、規模を減ずるも、二基の土壇が南北に相對して存在し、更に其南方約二十間にして東西に長く延びたる土壘十五間のこつて居る。(中略)下野国分尼寺に就いては従来何等の聞く所なれど、其の位置・規模及遺瓦などの上より察するに、此地を擬するが最も穩当の様

はれる」と指摘しており、有力な候補地のひとつではあったものの、未調査のままであった。このような状況のなか、尼寺跡が発見された経緯が、昭和44年（1969）の『下野国分尼寺跡発掘調査報告書』に以下のとおり記されている。

「平地林にあった壊滅寸前の尼寺跡が発見されたのは、昭和39年4月19日である。この日、文化財保護課では昭和39年度に実施する計画であった国指定史跡下野国分寺跡の下調査のため、係員を現地に派遣して遺跡の状態を確認させた。この日の調査が終了した頃、国分寺跡の東側の台地で瓦片が発見されているという情報をえた。直ちに現地に急行したところ、山林は工場敷地としてすでを買収され、伐採が行われていて、間もなくブルドーザーが入る段階に来ていた。古瓦片はかなり広範囲にまたがって撒布し、中でも後に金堂址と確認された地ふくれの西側では、削られた基壇の断面に地覆石が露出していた。この地点は小字を釈迦堂といい、国分寺尼寺跡の推定位置に擬せられていた場所である。（中略）文化財保護課では事の重大性に鑑み、翌20日も更に係員を現地に送って善後処置※に必要な資料を集めさせると共に、現地の作業員にはブルドーザー搬入の禁止と栃木県教育委員会は口頭で伝え、この確認を国分寺町教育委員会と石橋警察署川中子派出所に依頼した。」

そして昭和39年（1964）5月9日から第1次調査が実施され、金堂・講堂・中門などが確認された。面的な国分尼寺跡の調査事例として全国で最初の事例であり、その成果をうけて昭和40年（1965）4月9日付けで国指定の史跡となり、その後4次にわたる発掘調査（昭和39～41・43年度）が行われた。昭和42～45年度（1967～1970）には史跡整備が行われ、昭和45年（1970）に史跡公園として竣工、供用が開始された。当時、尼寺跡の史跡整備は全国でも例が無く、最初の事例となった。

このような国分尼寺跡の発見から史跡整備までの流れを受け、旧国分寺町は昭和47年（1972）に文化庁から文化財保護モデル地区に指定された。下野国分尼寺跡の保護・活用を中心に町をあげた文化財の調査保護活動を開始し、その一環として町指定の文化財を町ぐるみで保護する取り組みを進めることとなった。

※善後処置：残った問題を処理すること。

### (3) 下野国分寺・国分尼寺跡を取り巻く歴史的環境

下野国分寺跡・国分尼寺跡の周辺には、これまでの発掘調査によって庶民の住まいである竪穴住居の跡が100軒以上、井戸跡は10数基確認されており、古代の集落やそれに関連する遺跡の数は、21を数える。これらの集落は、国分寺跡と国分尼寺跡の間にある小さな谷を挟んで、東西の台地上におよそ8世紀前半から11世紀にかけて営まれていたものである。これらの住居は、国分寺・国分尼寺建立以後の遺構が大半であり、このことから国分寺・国分尼寺建立が周辺集落形成の契機となったといえる。中世に官寺の仏教寺院としては衰退したものの、下野国分寺は地元住民の信仰及び活動の拠点となり、その後国分寺という寺院は場所を移しながらも信仰やその活動は引き継がれ、近世には平地林となったことで住民の生活環境の一部となりながらも、寺院跡として現代まで認識されてきた。このように国分寺跡・国分尼寺跡周辺の集落の変遷は、寺のあり方と密接に関係していたと考えられている。

#### 1) 旧石器時代から古墳時代

これまでの約50年にわたる下野国分寺跡及び国分尼寺跡の寺域や周辺域の発掘調査成果により、約1万2千年前の旧石器時代から縄文時代後期にかけて、継続性はないものの人が生活した痕跡が確認されている。弥生時代後期には小規模な集落が形成されたが、古墳時代になると、大型の古墳（首長墓）や後期群衆墳が造られるようになり墓域とされたことから、集落は形成されなかったと考えられている。

## 2) 奈良時代から室町時代

奈良時代後半（8世紀後半）から室町時代（14世紀頃）にかけて、本地域周辺には多くの人が集住していたことが判明している。国分寺跡・国分尼寺跡周辺で発見された竪穴住居跡の遺構は、そのほとんどが8世紀後半以降のものであるが、そのなかでも9世紀後半から10世紀前半頃と考えられる遺構の数が約7割を占めている。

9世紀前半には国分寺の主な堂宇が完成し、寺の周囲が掘立柱の塀で囲まれ、寺の敷地と周辺の集落や田畑が明確に区分けされた。この頃の住居跡の数が増えていることから、寺の周辺に住む人々の数が増加して集落が形成されるのは、9世紀後半以降と考えられる。これらの大部分は、寺の経営基盤を支える庶民（農民）たちのものであったが、中井2号遺跡では、9世紀代の鍛冶炉<sup>かじろ</sup>を持つ住居跡も発見されていることから、下野国分寺・国分尼寺の改修工事の際に使用される工具類の修理や、造営に必要な釘などの鉄製品を製造していたものと考えられ、こういった鉄生産に従事した一部の工人たちも寺の周辺に住んでいたと推察される。9世紀後半に国分寺は主な堂塔を囲む掘立柱塀が築地塀に建替えられており、堂塔や伽藍を囲む築地塀などの工事に必要な人員や寺院運営のための人員確保も目的のひとつとして、周辺に集落が形成されたものと考えられている。

## 3) 古代の集落から中世の集落へ

9世紀後半には、国分寺の大規模な改修が行われたが、10世紀になると、寺の敷地を区画する溝や築地塀の溝の掘り直しを行わず、主な堂宇の補修も部分的にしかな行われなくなり、寺は徐々に衰退していった。周辺遺跡の発掘調査結果をみても、9世紀後半～10世紀には、本来は寺の敷地であるはずの溝の内側の地にも竪穴住居が設けられていることから、寺の荒廃により、寺の土地に対する人々の認識が徐々に薄れていったと考えられている。しかし、寺の周囲には中世に入っても墓が造られていることや、台地上を区画する溝が掘られていることなどから、周辺には多くの人々が住んでいたと推察される。

13～15世紀の下野国分寺跡には、倒壊した金堂の基壇上の小規模な堂とみられる柱の痕跡や、板碑などが出土したことから、官寺ではなくなったものの仏教の信仰が続けられ、その活動を担う人々が周辺の集落に居住していたと考えられている。また、当時この地を支配した小山氏によって寺院が保護されて、場所を移して現・国分寺へと引き継がれたが、国分寺跡には東薬師堂、国分尼寺跡には釈迦堂などの字名が残っており、これらの宗教施設がのちの現・国分寺の建立に繋がったと考えられている。

このように、下野国分寺・国分尼寺の周辺に形成された古代集落は、寺院の変化とともに人々の信仰や活動の形を変えながら受け継がれ、中世にも寺院及び仏教信仰を中心に形成されていったものと考えられている。

## 4) 近世

近世までには下野国分寺跡及び国分尼寺跡は雑木林、すなわち平地林となり、周辺地域を含め農村景観が広がっていたと考えられている。生業としての農業では、資料で確認できる作物として、米や麦といった穀物をはじめ、綿や瓜などがみられるが、近世にはじめられた干瓢生産により農家や夕顔畑などによって、独特な景観が形成された。また文化3年（1806）刊行の『日光道中壬生通分間延絵図』に描かれているように、近世に行われた街道整備にもなって並木が整備され、部分的に現存している。これらを考慮すると、近世の国分寺地域は、農村景観を形成する水田や畑地、水路や農家といった構成要素とともに、古

墳や寺院跡などが起源となる平地林のほか、街道の並木など、様々な樹木群も景観に大きな特徴を与えていたと推測できる。

### 5) 近代から現在

近代以降も、国分寺・国分尼寺跡周辺は平地林が維持され続けていた。周辺には寺山のほか、山神、山王、山王久保といった字名が存在し、神仏に由来する神聖な土地という意識が引き継がれていた。周辺地域の住民によると、特に僧寺であった国分寺跡は寺山<sup>てらやま</sup>と呼ばれ、そこからは薪をはじめ、山菜やキノコなど一切のものを採ってはいけぬ。持ち帰ると祟られる、と代々言い継がれてきたという。このような事象は、民俗学において怪巻<sup>けまき</sup>の地と呼ばれ、大正10年(1921)に史跡指定を受けた後も埋蔵文化財としての国分寺跡は、地域の人々の空間認識によっても守られてきたといえる。そして昭和39年(1964)の発掘調査では建物が倒壊した状況がそのまま出土し、遺構は良好な状態であった。

一方、国分尼寺跡は釈迦堂という字名などから尼寺跡の推定地ではあったものの、昭和39年(1964)に緊急発掘調査の開始まで、古墳を契機として形成された現在の天平の丘公園から広がる平地林の一部となっていた。開発計画がきっかけとなって発見に至ったが、それまでは干瓢生産や稲作などを生業とする農村集落における里山、すなわち地域住民の生活環境の一部として機能していた。



下野国分寺跡と国分尼寺跡（陸上自衛隊東部方面航空隊撮影）  
 <国分寺町教育委員会『下野国分尼寺跡史跡整備事業報告書』，1971.3，図版1>

## (4) 下野国分寺・国分尼寺の信仰を伝える歴史的建造物及び景観要素

## 1) 現・国分寺（薬師堂・釈迦堂・五輪塔）

現・国分寺（紫雲山国分寺）は、栃木市国府町の勝光寺の末寺であり、下野国分寺跡の北東約700m、国分尼寺跡の北方約500mに位置する。この寺は、中世、律令制の衰退とともに国家的な保護を失った下野国分寺が、小山氏の保護を受けて現在の位置に再建され、小山氏の私寺化にいたったものと推定され、下野国分寺・国分尼寺廃絶後を考える上で重要である。

現在は無住の寺で、院名は瑠璃光山安養院国分寺、宗派は真言宗である。境内には、平成20年（2008）に建て替えられた本堂のほか、薬師堂、釈迦堂、五輪塔や雷電神社などが所在し、昭和39年（1966）に尼寺跡が確認されるまでは、この地が国分尼寺跡と考える説もあった。

現・国分寺に関する資料として、享保年間（1716～36）の年号のある薬師堂縁起の版木が現存するほか、『下野古文書集解』では、文明9年（1477）頃、すでに釈迦如来への信仰があったことが記されている。これは、現・国分寺の本尊が釈迦如来であること、日光の修験と密接なつながりがあったこと、民衆の信仰を集めていたことを示している。



現・国分寺本堂



現・国分寺配置図



## ①薬師堂

現・国分寺境内の北西に位置し、方3間の寄棟造棧瓦葺で前面に一間の向拝を設け、四周に縁をまわす。彫刻は内法より上部に集中し、木部と彫刻には彩色が施されている。この薬師堂の年代に関する資料として、平成19年(2007)に堂内の薬師如来坐像の調査を実施しており、その際に仏像が安置されている厨子の中で棟札が確認された。

その棟札によると享保21年(1736)1月に建立されたと記されている。木部や彫刻にみられる彩色など後補もしくは後の時代の修理と考えられる部分もみられるが、小規模ながらも組物、彫刻などの装飾が多く、近世の建築と考えられている。また、大正13年(1924)4月27日に薬師堂の屋根を修理した際に記された棟札も確認されており、建物の形式などから、現存建物の屋根修理に関する資料の可能性が高い。



現・国分寺薬師堂

## ②釈迦堂

本堂と薬師堂の南に位置し、内部には市指定文化財である平安時代末期の定朝様式の高さ90cmの釈迦如来坐像しゃかによらいざぞうが安置されている。現存する建物は方2間、寄棟造垂鉛鉄板葺の小規模で簡素な造りである。写真等の記録から、平成元年(1989)に茅葺から現在の垂鉛鉄板葺に改変したほか、板壁を新しくし、天井が張られたという。現存の建物の詳細な建築年代は不明であるが、昭和36年(1961)撮影の航空写真で茅葺の方形建物が確認できる。これが現存建物(屋根葺替前)であるとみられることから、少なくともそれ以前の建物であることがわかる。また大正時代の栃木県による史跡調査で、釈迦堂の礎石には国分寺跡(もしくは国分尼寺跡)の礎石が使用されていることが報告されている。それを受け大正10年(1921)には栃木県知事名で下記の礎石の保存命令が出され、この調査時の建物が現存建物と考えられている。

釈迦堂の南には享保16年(1731)、宝暦年間(1751~64)銘の十九夜塔のほか、元文5年(1740)銘の青面金剛文字塔、宝永6年(1709)銘の念仏供養塔が現存する。



現・国分寺釈迦堂



現・国分寺釈迦堂(修理前)

下都賀郡国分寺村大字国分 国分寺  
 其ノ寺ノ境内仏堂タル釈迦堂台石ニ関シ左記ノ通り命令ス  
 大正十年六月二十二日

栃木県知事 ひらつかひろよし 平塚廣義

一、当該台石ハ国分寺ノ礎石ニ付破壊セザル様永久ニ保存スベシ  
 二、保存スヘキ台石ハ東面四個西面四個計八個ニシテ就中西面南ヨリ二ツ目ノ台石ハ塔真ノ礎石ナ  
 レハ特ニ注意スベシ  
 三、該礎石ハ現在ノ用途ノ其ノ位置ニ異動ナク適当ニ之ヲ保存スベシ  
 四、該礎石ニ変化ヲ生シタル場合ニハ遅滞ナク之ヲ届出ツベシ

(『白石旭家文書』)

栃木県知事による釈迦堂礎石の保存命令



釈迦堂の礎石

### ① 五輪塔

現・国分寺の境内、薬師堂の南西に、聖武天皇、光明皇后、行基菩薩を祀ったとされる比較的大きな五輪塔3基があり、いずれも鎌倉時代後期以後のものといわれている。また、19世紀初め頃の様子を描いたとされる文化3年(1806)の『日光道中壬生通分間延絵図』に、3基の五輪塔が本堂西側に描かれ、現存の五輪塔が描かれたものと考えられている。



19世紀初め頃の現・国分寺の様子

<『日光道中壬生通分間延絵図』1806完成,東京国立博物館所蔵>



現・国分寺五輪塔

## 2) 平地林

国分寺地域は、市内で減少傾向にある平地林が比較的に残っている。この地域の平地林はかつて、現在の天平の丘公園から国分尼寺跡周辺まで一体となって広がり、周辺の農村集落の里山として利用されていた。その後、国分尼寺跡として調査、保存、整備等が行われた部分は平地林ではなくなったものの、現存する平地林は現在も干瓢生産をはじめとした農村集落の里山としての利用が継承されている。

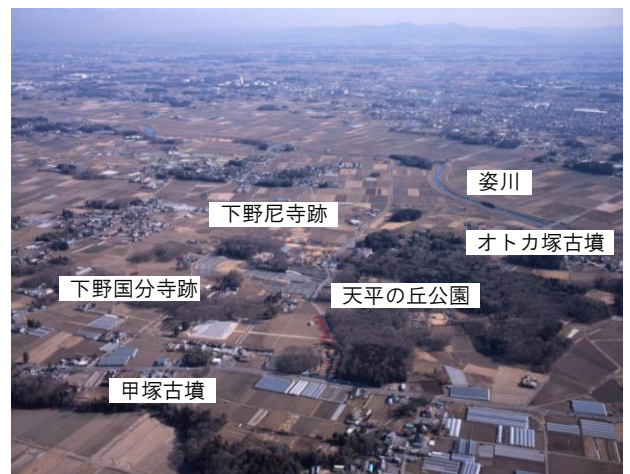
このように下野国分寺跡・国分尼寺跡は長く平地林に覆われる形で遺構が保存されてきた。それと同時に、とりわけ古墳などが契機となって形成された平地林は古代以来、人々の生活と密接にかかわり、現状においてこの地域の重層的な歴史景観を示す非常に重要な構成要素であるといえる。

平地林の起源は明らかになっていないが、天平の丘公園周辺の平地林は、少なくとも昭和22(1947)年の航空写真において確認できる。

既存の平地林や古墳を活かして整備が行われたのが、天平の丘公園である。公園の完成後、町文化協会により平美林会が組織されて除草清掃が行われるようになり、現在も継続されている。公園内には万葉植物園も整備され、講師会によって管理が行われている。さらに秋山亭では春の天平花まつりにあわせて山野草展が開催されるなど、これらの活動はすべて市民が主体となって行っている。



天平の丘公園



国分寺地域の平地林の環境



天平の丘公園周辺航空写真  
 < 国土地理院 1947年撮影 >

## 3) 鹿嶋様

下野国分寺跡の周辺には、国分寺跡を中心に北に薬師堂、東に鹿嶋（北東）、国分尼寺跡付近には釈迦堂、山神、龍神際、山王など諸祭神に関わる字名が残る。このことから様々な信仰が混在していた地域と考えられている。しもつけ風土記の丘資料館西側の鹿嶋と呼ばれる地域には、茨城県鹿嶋市の鹿嶋神宮の神を祀った祠が所在する。

祠のある場所は昭和22年（1947）及び昭和36年（1961）の航空写真においてもその場所が区画されていることが確認でき、また、町史などの資料から明治



鹿嶋様の祠

42年（1909）から字名として鹿嶋と呼ばれていることが分かっている。鹿嶋神は、疫病や飢饉、天災などの災厄から村を守る神であり、大きな藁人形やワラジを村境に立て、鹿嶋様と呼んで信仰する風習が全国で行われている。当地域においても、この鹿嶋様に対する信仰が現在まで受け継がれて残っている。

## (5) 下野国分寺・国分尼寺周辺における信仰に関連する地域活動

下野国分寺・国分尼寺は、国家仏教から地域の信仰対象として位置付けを変え、場所も現・国分寺へと移ったものの、仏教に対する信仰は形を変えながらも続いている。国分寺地域は、住民の結束が強く、自立的な地域活動が古くから続けられている。

国分寺地域の祭礼と伝統行事

	現・国分寺	愛宕神社	その他社寺	伝統行事等
1月				正月飾り
2月	13日頃：カツクレ（薬師堂）			
3月			25日：天祭（雷電神社※）	上旬：符行
4月	8日：花まつり（釈迦堂）			
5月	御影供（※旧暦3月21日、安養院で実施）			
6月				3日：現国分寺境内清掃〈年番〉
7月				
8月	19日：わっかくぐり（四万八千日縁日・薬師堂鳥居前） 31日：薬師如来例祭（薬師堂）			11日：わっかくぐりのススキ取り〈信徒総代〉 5日：現国分寺境内清掃〈年番〉
9月	1日：施餓鬼会（安養院） 16日：大杉様（薬師堂）			8日：愛宕神社清掃〈氏子〉
11月		24日：秋例祭		秋例祭前に境内で神社のしめ縄を交換（愛宕神社）
12月		20日前後：神社での札の配付〈神社総代〉 31日：神社でのお守り、破魔矢の販売〈神社総代〉		16日：薬師堂清掃〈信徒総代〉

※現・国分寺の敷地内にあり

## 1) 現・国分寺への信仰

現・国分寺は住職が置かれていないため、檀家の人々が伝統行事や寺院の管理を自主的に行っている。

主な活動として、以下の2つの伝統行事があげられるが、その他の行事としては、花まつりや薬師如来例祭、大杉様、符行、天祭等が現在も継続されている。また寺院の管理については、薬師堂及び釈迦堂で行う行事の担当、堂内の除草・清掃を行う者を年番と呼び、各地区から各1名を選出して実施している。選出された者の中で一番年長者が薬師堂と釈迦堂の鍵を管理している。

## ① 符行

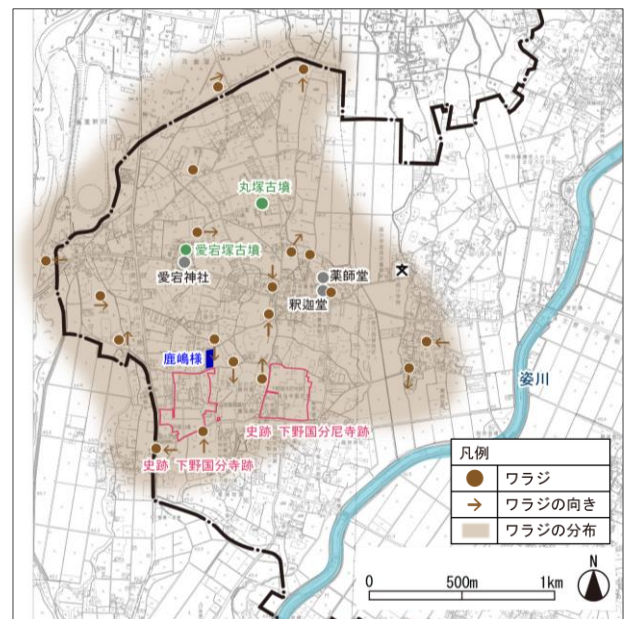
国分寺地域で行われている符行とは、病気が流行する季節の変わり目に病気が外から入ってこないようにワラジを作り、主に地区の道筋に飾る伝統行事の一つで、本市では国分寺地域のみで実施されている独特な行事である。以前は大ワラジとともに厄除けの梵字や「疫病除」と墨書した付け木（火起こしに使った薄い木皮）を付けて飾っていた。現在は、毎年3月上旬に年番が、現・国分寺境内にある集落センターに集まってワラジを作り、それぞれの集落の決まった場所に飾っている。

符行の正確な起源は明らかではないが、大きな藁人形やワラジを村境に立てて災厄から身を守る鹿嶋信仰を起源とする行事と関わりがあると考えられている。鹿嶋様の祠がある場所は、昭和22年（1947）及び昭和36年（1961）の航空写真においてもその場所に祠があることが確認できる。また、町史などの資料から明治42年（1909）には鹿嶋という字名で呼ばれていることがわかっている。明治時代から疫病や飢饉、天災などの災厄から村を守ってくれる鹿嶋神を祀っており、現在も地元住民によって管理されている。国分寺地域で行われている符行は、この鹿嶋信仰の流れを汲んでおり、少なくとも符行の起源は明治時代にまで遡ることができる。

符行の「符」は、この護符のことである。古くから人々は、村で起こる病気や天災は村外からやってくる悪霊邪気・悪魔・厄神などの仕業と考えていた。そこで、村の出入り口などの道辻にワラジや護符・祈祷札などを立てることによって、村に侵入する悪疫や厄神などを阻止しようとした。これを辻止め・辻固め・辻切りなどという地域もある。国分寺地域では、「この村にはこんなに大きなワラジを履く巨人がいることを示し、疫病神も巨人も恐れて村に入らないのだ」という。また、このワラジをオバケゾウリと呼ぶ人もいる。



石像群等の覆屋の軒に飾られたワラジ



符行におけるワラジの分布

②カツクレ（鯉供礼）

現・国分寺境内に所在する薬師堂では、毎年2月13日頃（従来は旧暦の正月13日）にカツクレと呼ばれる祭礼が行われている。起源は明らかではないが、明治31年（1898）の『薬師祭鯉番連名費用帳』が存在することから、この頃には既に行われていたことが分かる。

この祭礼がカツクレと呼ばれるようになったのは、鯉を仏に供える<sup>かつおくれい</sup>鯉供礼からと考えられている。言い伝えによると、茨城の浜から栃木へカツオや串柿、ネギなどを運ぶ途中に現・国分寺薬師堂前にさしかかったところ、馬が倒れてしまい、途方に暮れていた馬主と地元住民が馬の助命を願い、馬が運んでいた品物を薬師堂に供えて祈願したところ、馬が立ち直り、無事栃木への運搬の役目を果たすことができたという。この薬師堂の御利益が広まり、地元の人々の信仰の対象となったと考えられている。

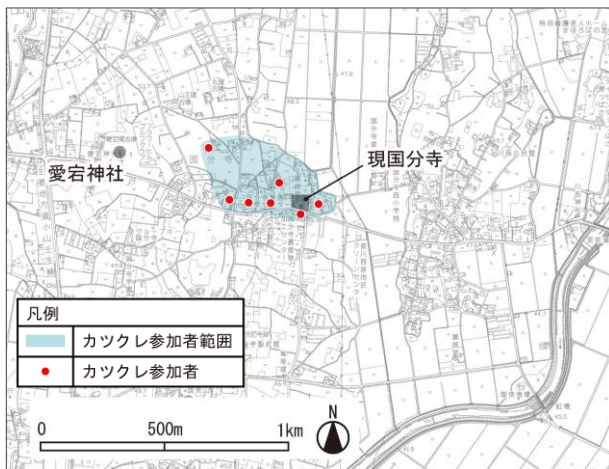
祭礼は国分寺地域に昔から住んでいる近藤姓と前原姓を名乗る16軒の家を中心に行っている。その中から当番2名が選ばれ、当番を中心に祭礼が執り行われる。当初は薬師堂の護摩壇に生のカツオを供えられ、住職による護摩祈祷が行われていたが、地域住民の高齢化などにより、現在は生のカツオではなく、煮干しとネギ、干し柿を供えて祈禱を行っている。薬師堂での祈禱が終了すると、同境内に所在する公民館で直会となり、祭礼が終了する。



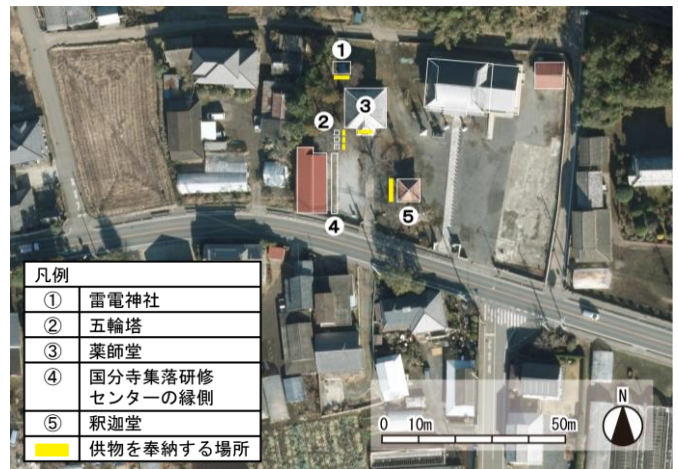
薬師堂内での祭礼の様子  
 <国分寺町『国分寺町史 民俗編』,2001.3>



明治31年  
 『薬師祭鯉番連名費用帳』



カツクレ参加者の居住範囲



カツクレしつらい図

2) 継承と地域住民による保護活動

下野国分寺跡が史跡に指定されると、国分寺西小学校と花見ヶ丘フラワー会による国分寺跡周辺の除草・清掃活動が開始された。活動開始当初は、上記2団体のほかに<sup>かぶとかい</sup>甲会という史跡の公有化に伴い移転した5軒の住民が中心となったグループも活動を行っていたが、国分寺西小学校が甲会の活動していた範囲の除草・清掃を引き継いだ。国分寺西小学校は、昭和40（1965）及び昭和41（1966）年に行われた下野国分尼寺跡の第2次・第3次発掘調査の際に栃木県の発掘調査団の宿舎として提供されたほか、子ども達が直接下野国分尼寺跡の出土遺物を見て触れる機会を得たことで、文化財に対する意識向上や郷土愛の醸成を促進する機運が高まり、昭和42年（1967）2月10日に文化財愛護子ども会が結成されて、下野国分寺跡・

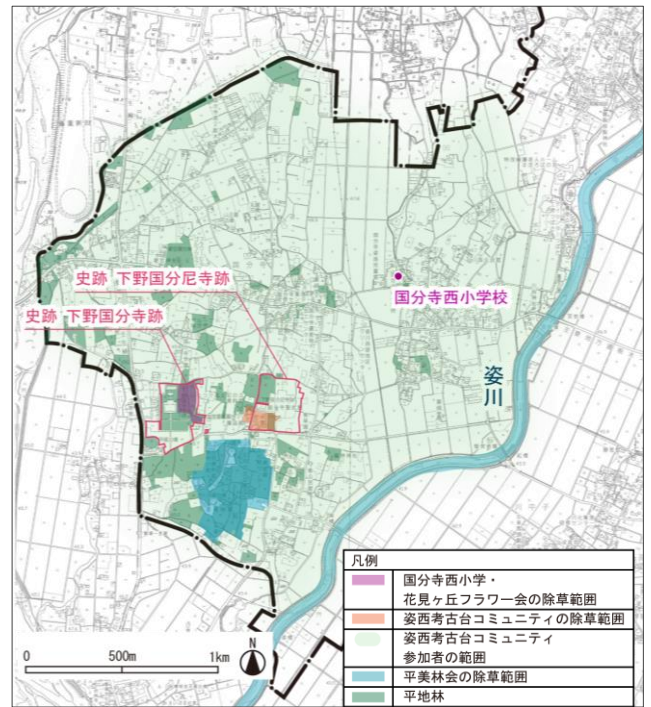
国分尼寺跡や地域の神社、寺院の除草・清掃活動を開始した。活動は現在も生徒達による下野国分寺跡の落ち葉さらい作業に引き継がれ、保護者による下野国分寺跡の除草活動も加わって下野国分寺跡・国分尼寺跡の維持管理活動が継続されている。なお、平成31(2019)年4月1日に国分寺西小学校は国分寺小学校に再編された。また、花見ヶ丘フラワー会の活動が平成30(2018)年度で終了し、現在、国分寺小学校が下野国分寺跡の除草・清掃活動を実施している。

このような流れを受けて、昭和52年(1977)には文化財保護活動を目的とした地元住民による姿西部考古台コミュニティが組織化されて、春と秋の年2回、天平の丘公園の除草、清掃といった作業への協力が始まり、現在も地域住民の協力により良好な保存環境が保たれている。

下野国分寺跡、国分尼寺跡は、史跡への指定以降、継続して地元の小学校や団体により清掃作業などが行われ、地域との密接な関わりを持ちながら保存されている。

また、国分寺町の町長を7期務め、文筆家でもあった若林英二氏の著書に、下野国分尼寺跡の遺構発見以前の様子が詳細に記されている。下野国分尼寺跡は昭和39年(1964)に偶然発見され、昭和42年(1967)から日本初の国分尼寺跡として史跡整備が実施された。それ以前は平地林としての雑木林で、干瓢生産農家をはじめとした地元住民の生活空間の一部、いわゆる里山であった。このような土地が国分尼寺跡の発見と整備を機に地域の宝として再生し、昭和55年(1980)に始まり、今年40回目を迎えた天平の花まつりには多くの人が訪れ、栃木県を代表する桜の名所となった。

平成25年度(2013)に第1次整備が完了した下野国分寺跡と国分尼寺跡には、近接する古墳群なども含め実際の遺跡と出土資料が合わせて見学可能な施設として、しもつけ風土記の丘資料館、栃木県埋蔵文化財センターとともに、栃木県下の小学6年生が毎年3,000人以上歴史学習に訪れている。



下野国分寺跡・国分尼寺跡における地域住民による保護活動範囲



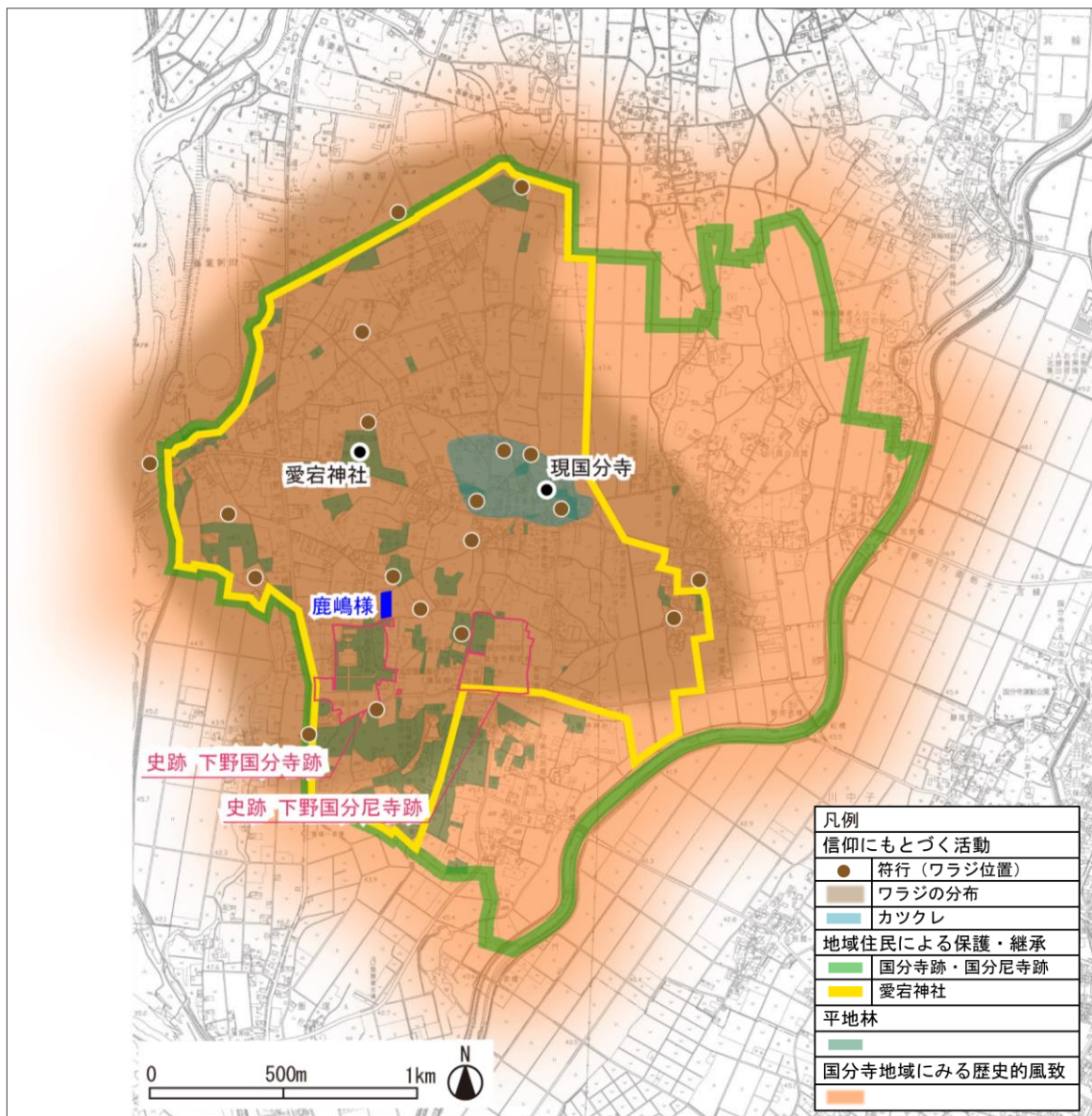
国分寺西小学校児童による下野国分尼寺跡除草活動  
 <国分寺町『国分寺町政だより』, 1971, 10月号>



姿西部考古台コミュニティによる下野国分尼寺跡除草活動

(6) まとめ

国分寺地域における歴史的景観は、奈良時代に創建された下野国分寺・国分尼寺と、寺院創建以前から築造された多くの古墳という古代の構造物がこの地域の空間構造の基盤となったといえる。官寺としての仏教寺院である下野国分寺・国分尼寺は11ないし12世紀頃には衰退したものの、集落や人々の生活はこの仏教寺院とのかかわりの中で形成され、発展してきた。その後、現在に至るまで寺院跡を含め周辺地域は、大きな開発などが行われることなく、古代以来の空間の基本構造を保ち続けてきた。中世、近世を通じて古墳や寺院跡は平地林の一部となり、地域住民の生活にかかわりも持ちながらも、神聖な土地という意識は連綿と受け継がれてきた。その一方で仏教寺院としての国分寺は場所を変えて現・国分寺に引き継がれ、周囲の神社などの宗教施設とともに、この地域における信仰の拠点となって伝統行事などが継承されてきた。また里山として利用される平地林や集落で営まれる日常生活や農業などの生業も、古墳や寺院跡との歴史的な関係の中で形成、継承されてきた。このように国分寺地域では、古代からの空間構成をもとに形成、継承されてきた歴史的景観と人々の生活が魅力的な歴史的風致を形成しているといえる。



国分寺地域にみる歴史的風致



## コラム

## 愛宕神社

県の史跡愛宕塚古墳の現存する墳丘の南側に設けられ、天下泰平国家安康火伏の守護神として下野国分寺の北東の位置に置かれた神社である。現存の社殿は、工事の際の写真や、大工が奉納した額によって、昭和3年（1928）の建築であることがわかっている。県道栃木二宮線に面して鳥居が設けられ、参道を進むと二の鳥居の奥に拝殿、本殿が配されている。本殿は一間社流造、屋根は銅板葺で千木、鰹木をのせる。拝殿は桁行3間・梁間2間の入母屋造平入銅板葺で、本殿とともに彫刻などの装飾は少なく、簡素な造りである。

愛宕神社には宮司がないため、氏子が自主的に管理を行っている。その氏子地域は、南国分・道北・道南・花見ヶ丘である。そして愛宕神社総代がこれらの地区から任期3年で選ばれ、神社の草刈りなどを主導し、神社の除草、清掃は原則として氏子全員が参加する。神社の除草によって出た草や枝は、大晦日から元旦にかけて氏子がお参りに来た時の魔除けや暖をとる際の燃料として保管する。また、この日は総代が神社にテントを張って泊まり込み、参拝者にみかん1個、甘酒、お神酒、お茶菓子、煮干しの配布やお守り（4種）、破魔矢の販売を行っている。



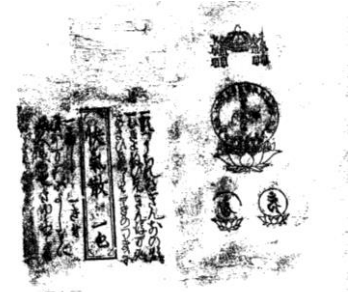
愛宕神社再建の際に奉納された工事写真  
昭和3年（1928）



国分寺愛宕神社における除草活動

## 薬師如来との関わり

国分寺跡、国分尼寺跡の北に位置する現・国分寺の境内には病気を治す仏である薬師如来を安置した薬師堂がある。また、現・国分寺において保管されている版木（札）の中に薬袋に使用する版木や「疫神除家内安全」と書かれたものがあり、古くから薬の調合と配付、疫病除けの祈願を行い、地域の人々から医薬の仏として信仰されていたことが分かる。



薬袋に使用する版木